

小学校での読書記録を活用した読書指導が  
「自ら本に手を伸ばす子供」の育成に及ぼす効果

生涯学習推進センター 長期研修員 板倉 真里

## 1 主題設定の理由

平成13年に公布・施行された「子どもの読書活動の推進に関する法律」では、子供の読書活動について「子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものである」と述べ、子供にとって読書が掛け替えのないものであることを示している。

また、平成16年2月の文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」では「これからの時代を考えると、読書の重要性が増すことはあっても減ることはない。情報化社会の進展は、自分でものを考える必要があるからこそ、読書が一層必要になるのであり、『自ら本に手を伸ばす子供を育てる』ことが切実に求められているのである。」と高度情報化社会の中での読書の重要性を訴えている。

「生きる力」の育成の場である学校において、子供たちに読書の楽しさを十分に味わわせ、「自ら本に手を伸ばし」読書を楽しむ習慣を身に付けさせることが求められている。

しかし、読書能力は小学校入学前の経験や、家庭での読書環境に負うところも大きく、個人差が非常に大きい。そのため学校においても個の実態を把握し、個に応じた指導を行うことが肝要である。さらに読書を習慣として身に付けさせるためには、子供自身の主体性を大事にしなければならない。読書指導は個に応じた指導により個の主体性を引き出す指導だと言えるだろう。

子供が読書習慣を身に付けるためには、読書の楽しさを味わうとともに、「自分はどんな本をどのくらい読んでいるのか。」「生活の中でどれだけの時間を読書に費やしているのか。」等自分の読書について具体的に知ることが効果的だと考える。そうすることで自分の読書の傾向や状況が分かり、読書への取組を主体的に考えることができるだろう。

そこで、子供が自分の読んだ本の記録をつけ、それを本人と教師が活用することによって、子供が主体的に読書を楽しむ力を伸ばし、ひいては「自ら本に手を伸ばす子供」に育つと考え、本主題を設定した。

## 2 研究仮説

子供が自らの読書の記録をつけ、教師がその読書記録を意図的、計画的に活用して指導することにより、子供の読書力（注1）が向上し、「自ら本に手を伸ばす子供」を育成することができるだろう。

## 3 研究の方法

- (1) 「自ら本に手を伸ばす子供」の具体像を設定する。
- (2) 読書記録用紙を作成する。

(3) 読書記録とその活用の実践をする。

実践前に質問紙法による読書の実態調査（7月20日～24日）を行い、個の実態を把握する。（事前調査）

読書記録を活用した実践を行う。（実践期間は9月1日～10月26日とする。）

(4) 読書記録とその活用の効果を検証する。

実践後に質問紙法による読書の実態調査（10月29日～11月2日）を行う。（事後調査）  
事前・事後の実態調査における児童の変容、読書記録の分析結果から効果を検証する。  
研究対象は所属校S小学校の3年生から6年生（各学年2学級 男子113名女子141名計254名）である。朝の活動（15分間）で火曜日は読み聞かせ、木曜日は自由読書を行っている。また、木曜日は家庭読書の日とし家庭での読書活動と呼び掛けている。

#### 4 研究の内容

(1) 「自ら本に手を伸ばす子供」の具体像の設定

ア 子供の読書環境

子供の読書は、その子を取り巻く読書環境から大きな影響を受ける。読書環境とは資料1に示すように、子供の生活の場である学校・家庭・地域の人的及び物的環境を指す。

子供は読書環境の影響を受け、本を手にし、時間の確保ができたとき

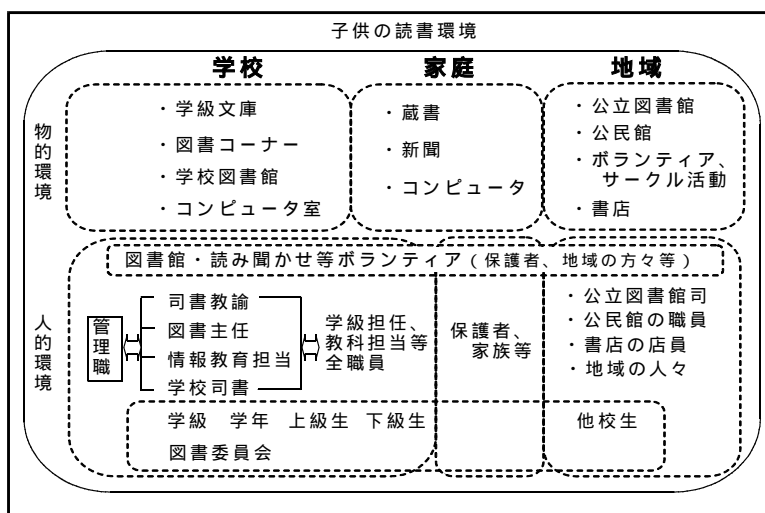
に本を読む。読書環境がよりよく変化すれば子供の読書への関心や意欲が高まり、読書習慣の定着が図られるだろう。子供が進んで読書環境に働き掛ける力を育成することが「自ら本に手を伸ばす子供」の育成につながる。

イ 「自ら本に手を伸ばす子供」の具体像

井上一郎氏の提唱する「読書行為の過程に即した読書力の体系」(注2)を基に「自ら本に手を伸ばす子供」の姿を具体化した(資料2)。これを「本を手にする」「本を読む」「読んだことを次につなげる」の3段階にまとめ、次の3点を「自ら本に手を伸ばす子供」の具体像とした。

学級文庫や図書コーナー、学校図書館を利用する子  
進んで本を読む子  
読んだことを表現する子

【資料1】子供を取り巻く読書環境



【資料2】自ら本に手を伸ばす子供の具体像

読書力	自ら本に手を伸ばす子供の姿
1 課題設定力	<ul style="list-style-type: none"> <li>好きな作家がいる。好きなシリーズ、分野がある。</li> <li>広告や書評、友達の読んでいる本など本の情報に興味を持つ。</li> <li>指定図書や推薦図書に興味を持つ。</li> <li>目的や興味に応じてこれから読む本を決める。</li> </ul>
2 読書計画力	<ul style="list-style-type: none"> <li>本を読む時間を作る。</li> <li>読書に関する目標（ページ・冊数、指定・推薦図書等）を意識して読む。</li> <li>題名や表紙、帯、などから読む本を選ぶ。</li> <li>友達や先生が紹介してくれた本を読む。</li> </ul>
3 読書行為力	<ul style="list-style-type: none"> <li>声に出して読む。 ・黙って読む。 ・じっくり読む。 ・速く読む。</li> <li>考えながら読む。 ・楽しんで読む。 ・集中して読む。 ・最後まで読む。</li> <li>たくさん読む。 ・いろいろな本を読む。 ・好きな本を繰り返して読む。</li> <li>話のあらすじが分かる。 ・読んで感想を持つ。 ・心に残る言葉や文を見つける。</li> </ul>
4 読書生活力	<ul style="list-style-type: none"> <li>時間を見つけて本を読む。</li> <li>学校図書館、学級文庫、公立図書館、書店等を利用する。</li> <li>目的に応じて図書資料を選び、活用する。</li> <li>読んだことを目的に応じてまとめる。</li> <li>読書に関する目標を達成する。</li> </ul>
5 読書反応力 (作品創造力)	<ul style="list-style-type: none"> <li>読んだ本を基に創作（続き話や感想画など）を楽しむ。</li> </ul>
6 パフォーマンス ・コミュニケーション力	<ul style="list-style-type: none"> <li>友達や教師、家族などと本についての話題を楽しんだり、情報交換をしたりする。</li> <li>ブックトークやおすすめの本の紹介などをする。</li> <li>読んだ本の紙芝居や人形劇などを演じる。</li> </ul>
7 記録・評価力	<ul style="list-style-type: none"> <li>読んだ本の記録をとる。 ・読書生活の記録をとる。</li> <li>読書傾向や読書生活を振り返り、より良くしようとする。</li> </ul>

注) 井上一郎氏の提唱する「読書行為の過程に即した読書力の体系」を基に筆者が作成

(2) 読書記録用紙の作成

ア 読書記録の指導について

(ア) 読書記録の分類

読書記録は大きく分けて、読んだ本人（自己）による記録と他者（主に指導者）による記録に分類される（資料3）。

本研究では子供の自由読書を対象に、子供が容易に取り組み、自らの読書について認識することが

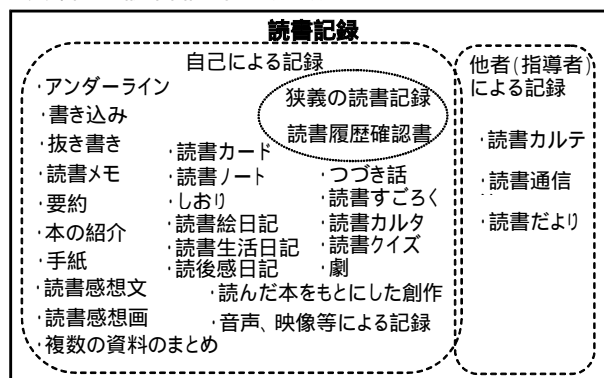
でき、かつ教師が個別指導に活用しやすいという条件から、読書履歴を確認するための読書カードを作成し、指導の主な手だてとした。読書カードを活用しながら、必要に応じて他の読書記録を用いて指導を行った。

(イ) 読書カード活用の効果

自己による読書記録は記録者自身の内面に働き掛けるとともに、記録者の周囲の読書環境への働き掛けを誘発する。読書カードを子供と教師が活用することにより、子供と読書環境との双方向の働き掛けが生じる。互いの働き掛けが活発になることで子供の読書活動が活性化され、読書力が向上し「自ら本に手を伸ばす子供」を育成することができる。と考える。

読書カードに読んだ本を記録することで読書履歴が残り、蓄積される。履歴を蓄

【資料3】読書記録の分類



注) 水野寿美子著『シリーズ・活動する学校図書館 7 読書指導』改訂版, 全国学校図書館協議会, 1999年を参考に筆者が作成

積することで子供は満足感、充実感を味わう。その結果、読書への意欲が高まったり、持続したりする。また、感想や文中の印象深い表現を記入することで読んだことの理解が深まり、定着する。蓄積した読書履歴を振り返ることで子供は自分の読書傾向が分かり、次に読む本の選書に生かすことができる。また、読書生活を見直すことができ、読書生活の向上を目指すきっかけとなる。更に読書履歴を積み重ね、振り返ることで自己の成長にも気づく。読書記録を繰り返し見返すことにより、読み取ったことが深化・定着し、自己形成につながる。

読書カードを教師（主に学級担任）が見取り、読書の実態を把握することで、学級や個の実態に応じた読書指導を行うことができる。家庭との連携に活用することで、学校と家庭が協力して読書活動を進めることもできる。

読書カードを活用し、親、教師、友達などの人的環境に働き掛けることによって、家庭の蔵書、学校図書館、学級文庫などの物的環境も整備される。

このように読書カードを活用することによって、カードを記入した子供だけでなく、読書環境全体が向上する。読書環境の向上により子供の読書活動がさらに活性化する、という相互作用の効果が期待できる。

## イ 読書カードの作成

### (ア) 読書カード作成の視点

子供の読書に関する法令等（注3）を参考に読書指導の方向性を押さえ、読書カードを作成する視点を以下のように定めた。

- ・子供の発達段階に応じた読書活動が推進できる。
- ・子供の読書活動への意欲を高め、持続させることができる。
- ・子供が読書の楽しさを知ることができる。
- ・子供が目標を意識することができる。
- ・子供が自己の読書生活について考えることができる。
- ・家庭と連携して読書活動を推進することができる。

### (イ) 発達段階に応じた読書指導

発達段階に応じた読書カードの作成と意図的・計画的な指導のため、学習指導要領の内容から学年の指導内容を決定した(資料4)。

【資料4】発達段階に応じた読書指導

	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
めあて	いろいろな本を読もう。		本を読んで考えを広げたり深めたりしよう。	
指導事項	本を読んで簡単な感想を持つ。	読書活動の場を広げる。	読書活動の場を広げる。 本の分類番号や作者名、シリーズ名などを参考にして本を選ぶ。 本の中から、心に残る言葉や文を見つけて書き写すことで、読みを深め、自分の考えを深めたり広げたりする。	
	友達に本の紹介をすることで本への理解を深める。 友達の読んでいる本を知ることによって本に興味を持ち、読書の範囲を広げる。			

注) 学習指導要領を参考に筆者が作成

## ウ 実践に用いた読書カード

3年生から6年生の学年ごとに読書カードを作成した。

### (ア) 学年共通の項目

日にち・題名・作者

「日にち」は読書生活の重要な情報である。「題名」と「作者」は対でとらえさせたい。作者に関心を持つことで読書範囲を広げたり、深めたりできる。

学年のめあて

資料4に則した学年のめあてを明示し、めあてへの意識を高める。数値目標は5小学校で取り組んでいたものである。数値目標は読書量に対する意欲を高める。

家の人から

学校と家庭が連携して読書活動を推進していくためには、保護者が子どもの読書の実態を知ることが大事である。読書カードをきっかけに保護者の読書への関心を高め、担任と意志の疎通を図り読書活動を推進していくことができる。

教師の言葉

個に応じた教師の指導の一つが、読書カードへの言葉書きである。子供がカードを提出するごとに欄外に記入した。

【資料5】3年生の読書カード

(1) 3年生

3年生の読書カードは、子供が抵抗なく楽しんで取り組めることを意識して作成した(資料5)。「いろいろな本」に関心を広げることを目的に、読んだ本を友達に紹介する「おすすめ度・おすすめメッセージ」の欄を設けた。友達に本を紹介する意識を持つことで読みが深まり、書くことへの意欲も高まる。読んだ本ごとにメッセージを記入する形式と読んだ本の中から1冊選んでメッセージを記入する形式のどちらかを子供に選択させた。

(ウ) 4年生

4年生の読書カードは、読書活動の場を広げることを意識して作成した(資料6)。様々な場所を利用して本を読むことを意識させるよう「どこの本」の欄を設けた。さらに、「ページ数」を記入することで本の質や読書量を意識させた。また、意欲を持続させるため5冊用と10冊用のカードを用意し、子供に選択させた。

【資料6】4年生の読書カード

A組のみ「読んでみたい本の題名」の欄を設け、この欄が読みたい本を意識し読書意欲を持続させることに及ぼす影響を、B組や他学年と比較し検証した。

(I) 5・6年生

5・6年生では、本を読んで考えを広げたり深めたりすることを意識して作成し

た。自分の読書の実態を見つめ主体的に読書に取り組むように、「自分のめあて」「振り返り」「選んだ理由」の欄を設けた。さらに、読んだことを内面化し、考えを広げたり深めたりすることができるよう「心に残った言葉や文」を記入する欄を設けた（資料7）。

5年A組、6年A組はこれから読みたい本のリストを活用し、4年A組と同様に影響を検証した（資料8）。「この本の次はあの本を読もう。」という思いは読書を連続させる。また、実際には本を読んでいなくても「あの本を読みたい。」という思いがあるということは、読書意欲が持続しているということであり、次の読書へとつながる。読みたい本を持つことで、読書への意欲がとぎれることなく、読書が習慣化するだろう。

### (3) 読書記録とその活用指導の実践

9月1日から10月28日までを実施期間とし、3年生から6年生までの全学級において上記の読書カードを常時活用した。カードは1週間に一度回収し、教師が言葉を書き込んだ上で児童に返却した。教師の言葉は、子供の記入した本に関することやその子に合った本の紹介など、記録及び読書への意欲を向上させるよう意識した。読んだ本の記入がない子供に対しては、励ましの言葉やその子の好みや季節に応じた本の紹介などを書き、読まなかったことを受容しながら読書意欲を喚起するようにした。

3年A組では、読書カードを1枚記入し終えた子供が、自分のカードを提示しながら口頭でお薦めの本の紹介を行った。B組は教室前の廊下に掲示板を設置し、記入し終えた子供の読書カードを教師が掲示していった。4年A組では読書カードの中から友達に紹介したい本を「おすすめメッセージ」カードに記入し、背面黒板に掲示した。

9月第1・2週の読書カードの実態と事前の実態調査から、家庭にある本を読む子供が多く、学級文庫の本を読む子供が少ないことが分かった。公立図書館や学校図書館に足を運び読みたい本を探す子供がいる反面、本を探すことに時間を割かず家庭にある簡単な本を繰り返し読んでいる子供も多かった。そこで、読書の意欲化を図るため、子供の身近に読みたいような本を置くことをS小学校に提案した。S小学校の校長・図書担当との話し合いで、御前崎市立図書館の集団貸し出しを利用した図書コーナーを設置することにした。3年生の教室前のスペースに低学年（1年生～3年生）用、6年生の教室前に高学年（5・6年生）用の図書コーナーを設置した。4年生は学級内に本のコーナーを設置した。コーナーの本は、読書カードでつかんだ実態を踏まえ、御前崎市教育委員会吉住幸子幼児教育係長に指導を受けて選書をした。子供たちに人気のある本や

【資料7】5・6年生の読書カード

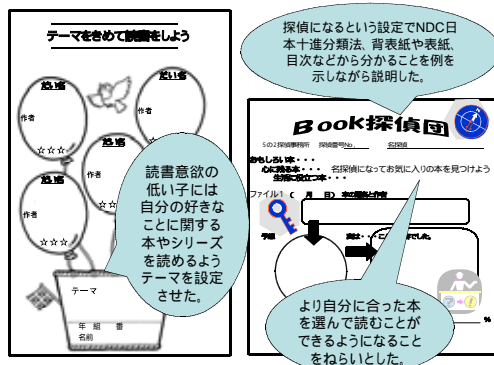
【資料8】これから読みたい本のリスト

手を出しやすく読みやすいシリーズ本を中心に、読み物だけでなく絵本、科学、スポーツ、趣味等多様な本をそろえた。(低学年、高学年用は約200冊ずつ、4年生は学級約30冊ずつ。)

3・4年生では読みたい本を選べなかったり、好みに合った本を見つけることができなったりする子供に対して、本選びの視点を設けた読書カードを新たに作成した(資料9)。様々な分野の本を読むことができるよう6つの視点を設けた「いろいろな本を読んでもみよう」、好きな分野やシリーズなど読みたいテーマを自分で決めて読むことができる「テーマを決めて読書をしよう」の2種類のカードから子供に選択させた。

5年生は読書カードの分析から、本の分類や選び方についての知識が不足している子供が多いことが分かった。そこで、本の表紙や目次から内容を推測して本選びをするカード「Book探偵団」を作成し、使用した(資料9)。

【資料9】実態に応じたカード



#### (4) 読書記録とその活用の効果の検証

##### ア 学級文庫や図書コーナー、学校図書館を利用する子の育成

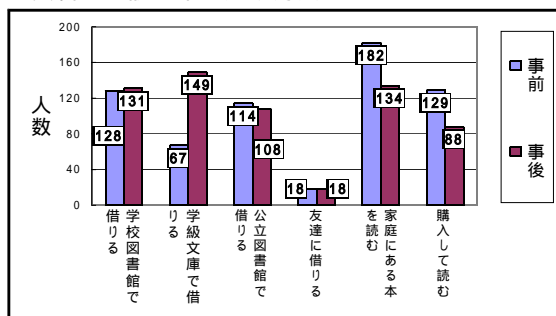
子供たちは休み時間に図書コーナーを利用して、本を選んだり読書を楽しんだりしている。読書カードには図書コーナーの本が多く見られるようになった。子供の身近に子供が読みたい本を置くことは、子供が自ら本を読むことに非常に有効であった。選書の際に子供の実態を考慮したことでより大きな効果が得られた。

読書カードからは、図書コーナーや学級文庫、学校図書館の同じ本が複数の子供に読まれていることが分かった。読書カードを活用した学級での本の紹介活動、子供同士の情報交換が各自の選書に影響を与えたためである。学級文庫、図書コーナー等を活用して友達や教師から紹介された本や自分の読みたい本を探して読むようになったため、家庭にある簡単な本を繰り返し読んでいた子供が減少した。

4年生以上では、読書カードの「どこの本」の欄を意識して学級文庫や学校図書館等を利用していることが、「振り返り」や「めあて」に表れていた。「家の人から」の欄にも学級文庫等の利用を促す言葉が書かれており、保護者の選書への意識の向上も見られた。

事前・事後の実態調査でも学級文庫(図書コーナーを含む。)の利用が大幅に増加していることが分かった(資料10)。

【資料10】読む本の入手方法



注) 調査対象 3年生～6年生254人 複数回答

S小学校区には公立図書館、書店がなく、子供だけの利用は困難である。学級文庫の利用の増加は、子供が読む本を探すために自主的に読書環境に働き掛けるようになった一つの表れだと考える。読書カードへの記録により子供たちの読書環境への意識が高まったこと、読書カードの活用によって読書環境の整備が進んだことが相互に作用し、子供の読書環境を活用する力が向上した。

イ 進んで本を読む子の育成

(ア) 読書日数、読書冊数の増加

事前・事後の実態調査の比較から、1週間の読書日数が2日以下の子供は減少し、3日以上の子供は増加していることが分かった(資料11)。3年生から6年生の1か月の平均読書冊数は6月が10冊、10月が12.7冊であった。9・10月は校内や地域の行事が多く子供たちにとって時間的にも精神的にも余裕のある期間ではなかったが、読書日数及び読書冊数が増加した。

事後の実態調査での読書記録に取り組んだ感想(資料12)からは、多くの子供が読書履歴を活用し読書生活に生かしたことが分かる。読書記録が子供の内面に働き掛け、課題設定

力・読書計画力・読書行為力・読書生活力を複合的に向上させたことが、結果として読書日数や読書冊数の増加として表れたととらえる。

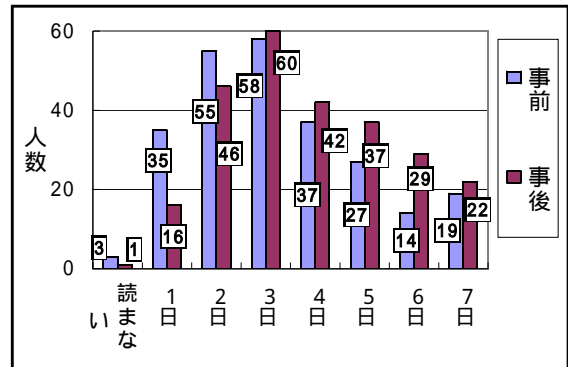
また、教師や家の人からの言葉掛けが子供の意欲を向上させたという記述もあり、見守り、認める教師や保護者の存在が、子供の意欲的な取組を支えていることが分かる。

(イ) 個の変容

6年A組のA男(資料13)は、毎週読書カードの「振り返り」を記入することを通し、自分自身を見つめ読書生活を向上させた。9月には本を1冊も読まなかつ

たA男だが、読まないことに対しての気持ちは変化をしていた。読書カードに記録がないことで本を読んでいない自分を見つめ、読みたいという気持ちを高めていっ

【資料11】1週間に本を読む日数



【資料12】読書カードに取り組んだ感想

肯定的な記述(226)		否定的な記述(24)	
読書量が増加した	43	書くことに抵抗を感じた	11
読書が好きになった	32	記入を忘れることがあった	6
読書への意欲が向上した	30	変わらない	3
達成感や満足感が得られた	26	読書が減った	2
書くことに意味を感じた	23	その他	2
記録を見返すことに意味を感じた	23	無記入(4)	
めあてを意識して読めた	21		
読む本の分野が増えた	12		
教師のコメントが意欲を高めた	10		
家の人の言葉が意欲を高めた	2		
友達の書いた本を読んだ	2		
その他	2		

(単位:人)

注) 調査対象は資料10と同じ 子供の自由記述を筆者が分類

【資料13】A男の変化

調査日	めあて	読書冊数	書名	振り返り
9月8日		0		読んだのにちゃんと書いてこなかったからちゃんと書きこんでいきたい。
9月15日	自分が読みたかった本を読む	0		マンガばかり読んでいたので小説を読んでいきたい。
9月22日	自分が読みたかった本を読む	0		図書館の本を読んでいきたい。
9月29日	自分が読みたかった本を読む	0		朝読書のとき読んだ江戸時代の本がおもしろかった。
10月6日		2	『からくり儀右衛門』『黄金色の風』	2冊読むことができた。
10月13日	週2冊読む	3	『日本の歴史』『朱赤の空』『赤い靴はいた』	1日にたくさん読むのではなく毎日読みたい。

注) A男の読書カードから抜粋



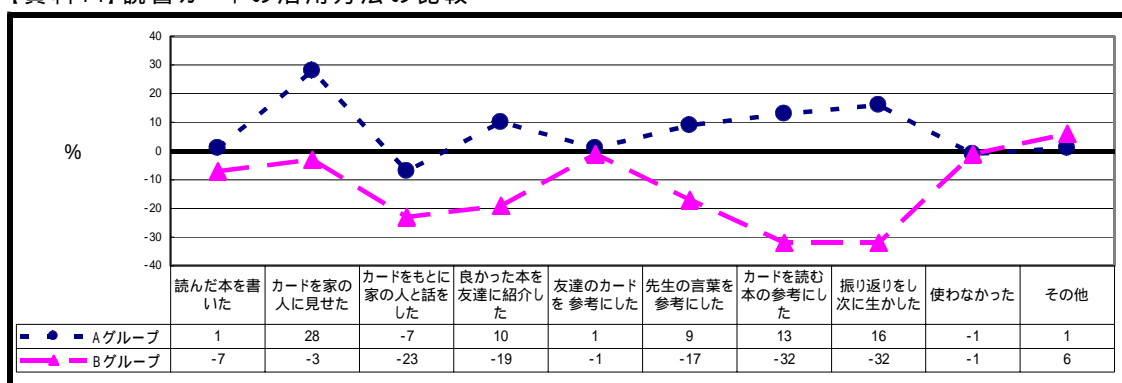
た。おもしろい本に出会ったA男は次々と本を読み、10月には7冊の本を読めるようになった。

5・6年生は自分のめあてを持ち、振り返りを行ったため、子供たちは読んだ本を見直し次への方向性を見いだしたり、本を読む場や時間など読書生活を見直し改善しようとしたりした。読書カードの記入が読書活動への主体的な取組を促し、読書量だけでなく、読書の内容や質について自ら意識した取組ができたと考える。

(ウ) 読書が「好き」に変容した子供と「嫌い」に変容した子供の差異

事後の実態調査で読書が「好き」に変容した子供31人（以後Aグループと呼ぶ）と、「どちらかといえば嫌い」または「嫌い」に変容した子供12人（以後Bグループと呼ぶ）の読書カードの活用方法を比較した（資料14）。

〔資料14〕読書カードの活用方法の比較



注) 調査対象は資料10と同じ 全回答における活用率を0としA・Bグループの子供の活用率との差を数値で表した。

資料14にみられるようにAグループは「カードを家の人に見せた」「振り返りをし次に生かした」など三つ～五つの多様な方法で活用をしている子供が多い。読書カードを多様に活用するということは友達、教師、家の人などとかかわり合いながら自分自身を見つめることである。自分自身を見つめる中で課題設定力や読書計画力が身につく、実際に読書に取り組む中で読書行為力や読書生活力が身に付く。読書カードを多様に活用することで読書環境に働き掛けながら自己の読書力を向上させることができるのである。

Bグループは記録はしたがほとんど活用していない。カードの提出回数が少ない子供もいる。しかし12人中8人は読書量が増加しており、学級文庫の活用も増加している。Bグループの子供たちはカードを見て自己を振り返ることをしていないため、このような自分自身の読書力の向上を自覚できていない。展開読書期（小学校4年生～中学1年生）（注4）の読書に関して「多読のなかで子どもは自分の好みを発見する。本が読めない子どもの多くは概して自分の好みが発見できていない子どもであり、何を読めばいいか決められない子どもであることが多い。自分自身が発見できていないともいえる。」（注5）という指摘があるように主体的に読書をするためには、様々な本に出会うことと自分を知ることが不可欠である。これはメタ認知能力とも関連がある。人とのかかわりの中で本のおもしろさを伝え合い様々

な本に出会わせ、読書意欲を向上させて読書の楽しさを味わわせることとともに、読書履歴を基に自分の読書について見つめることができるよう読書カードの具体的な活用方法を個別に指導し、自己を見つめる力を育成することが大事である。

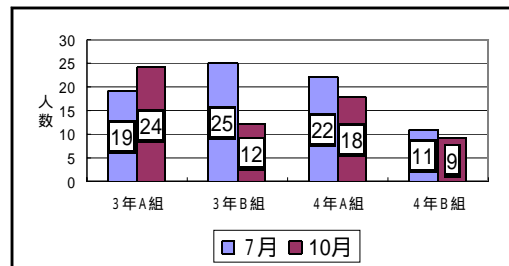
(I) 本の紹介方法の違いによる効果の差異

3年A組はおすすめ本の口頭紹介、3年B組は読書カードの掲示、4年A組は「おすすめメッセージ」の掲示を行い、4年B組は一斉での紹介活動を行わなかった。

口頭紹介をした3年A組のみ、読みたい本のある子供が増加し、24人(約86%)

がこれから読みたい本を意識している(資料15)。掲示による伝達は見た者にしか伝わらない。口頭伝達はその場にいる全員に伝えることができる。音声による伝達は子供たちの興味を喚起することに有効な方法である。掲示による伝達を行う場合にはより多くの子供が掲示に注目し、内容を読みとることができるような教師の働き掛けが必要であろう。

【資料15】これから読みたい本のある子供の人数の変化

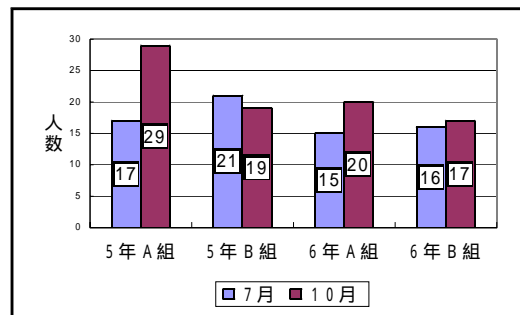


注) 調査対象 S小学校3年A組28人、3年B組29人、4年A組31人、4年B組31人

(ウ) これから読みたい本のリストの効果

これから読みたい本のリスト(資料8)を個人で持ち、常時使用した5年A組では、読みたい本があると答えた子供が12人増加し29人(83%)になった。学級用の読みたい本リストを掲示して使用した6年A組では、読みたい本があると答えた子供が5人増加し20人(65%)になった。読みたい本リストを使用しなかった5年B組、6年B組はほとんど変化がない(資料16)。4年A組では「読みたい本」の欄を活用した子供は8人だった。4年生では読みたい本を自主的に記録していくことは難しい。

【資料16】これから読みたい本のある子供の人数の変化



注) 調査対象 S小学校5年A組36人、5年B組35人、6年A組31人、6年B組33人

5年A組、6年A組はリストの効果で読みたい本への意識が高まったと考えるが、個人で使用した5年A組の方がより大きな効果が得られた。掲示をして使用する場合は紹介活動と同様に、全員がリストを活用するような教師の意識的な働き掛けが重要になる。読みたい本リストをいつでも使える状態にしておくことで、子供たちが常に本への関心を持ち情報を取り入れ、読書に生かすことができる。教師は本に関する情報の収集に努め、子供たちが「読みたい」と思う本に出会わせる働き掛けを継続して行うべきである。

ウ 読んだことを表現する子の育成

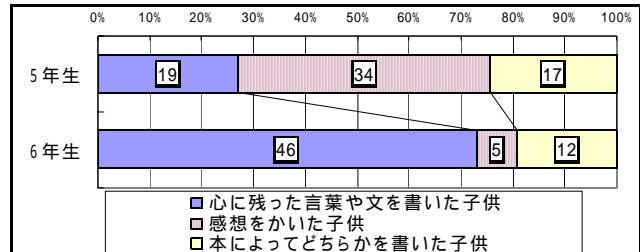
ほとんどの子供が読書カードに読んだ本の記録をすることができた。読書履歴を蓄積することで達成感や満足感を感じ、読書意欲が向上した子供も多い(資料12)。友

達に本を紹介する、家でカードを見せたり話をしたりするなど読んだことを積極的に表現することができた子供もいる（資料14）。友達、家族、教師などと本を紹介し合ったり、読んだ本の感想を共有し合ったりしたことで、人とのかかわりの中で読書の幅が広がり、読み取ったことを深めることができた。

3・4年生の「おすすめメッセージ」は抵抗なく取り組める形式で、おもしろい場面やあらすじの紹介、感想など個の力に応じた表現で記入することができた。

5・6年生の「心に残った言葉や文」【資料17】「心に残った言葉や文」への記入内容

「心に残った言葉や文」の欄は本文からの抜き書きに限らず、読後の感想も認めた。6年生は抜き書きをした子供が46人（73%）、5年生は19人（27%）であった（資料17）。



注) 調査対象 S小学校5年生70人6年生63人 読書カードの記入状況を筆者が分類 データの値の単位は人

事後の実態調査の自由記述には「心に残った言葉や文」に関

して5年生に一人「書くのがめんどろだった。」と書いた子供がいた。6年生では「書くことでお気に入りの本ができた。」「書いたのでその言葉が印象に残っている。」など肯定的な感想を書いた子供が7人おり、否定的な感想を書いた子供はいなかった。文章中の表現に着目し書き留める行為は、表現に即して内容を的確に読み取ることや優れた叙述を味わうことであり、国語科で身に付ける「読む力」とも深く関連してる。「心に残った言葉や文」の記入は学習で身に付けた力を日常に生かす場であり、読んだことを深化・定着させるものである。抵抗のある子供がいることに配慮しながら教科の指導とも関連づけ、文章中の中心的な表現に着目する力を養っていきたい。

読んだことで完結せず、書いたり話したりすることで読んだことが定着・深化・拡充に向かう。2か月間の読書カード活用により表現活動の素地ができてきた。今後カードの活用を継続することによって表現活動がさらに多くの子供に広がり、定着するものとする。

一方で読書カードの記入を負担に感じた子供が11人いる（資料12）。このような子供には個別の対応が必要だ。まずその子供の負担の原因を探り、カードの形式・形態、時間の確保等指導を工夫することで記録をつけることができるようにする。本を読んだこと、記録をつけたことに対する賞揚をし、記録をつけてよかったという思いを抱かせたい。さらに、実際に自分や友達の記録を生かして次に読む本を選んだり、友達に本の紹介をしたりして記録をつける意味を実感させたい。書く行為は国語力の育成においても非常に重要である。書くことに抵抗を感じない「書く力」を様々な場面で育成していく必要がある。

## 5 研究のまとめ

### (1) 研究の成果

子供たちは読書に関して、読書記録という具体的な資料ができたことで、本を読んだことに達成感を感じたり自分の読書について問題点を見つけたりして、主体的に読書に取り組むことができた。また、教師は子供の読書記録から実態をつかみ、子供たちの興味や読む力に合った本を子供の身近に置いたり、紹介したりして読書への意欲を向上させることができた。

子供の読書力の発達において学年に適した読書カードの形式とその活用方法があることが分かった。中学年では、周囲からの刺激により読書意欲を高めていくため、友達を意識した「おすすめメッセージ」の記入や読書カードを活用した口頭紹介が有効である。高学年では、自己認識の中で読書意欲を向上させるため、自分のめあてを持つ、定期的に振り返りをする、読んだ本の中から心に残る表現を見つけ書き写すことが有効である。

本研究における読書記録の活用により、子供たちに内在する知的欲求が刺激を受け、内発的動機付けが行われ、読書意欲が向上し定着した。さらに、自己を見つめたり他者とかかわったりすることができ、主体的な読書態度が身に付き、読書の量的な向上とともに内容の拡充が図られた。読書記録の活用は子供の読書力を向上させ、「自ら本に手を伸ばす子供」を育成することに有効に働くと言える。

また、読書記録活用の実践に取り組む中で子供たちの読書の実態を知った学級担任が、読み聞かせや本の紹介をしたり読書をテーマに学級便りを発行したりして、子供の読書に積極的にかかわろうとする姿勢が見られた。実態が明確になることで担任の読書指導への意欲を引き出すことができたことも本研究の成果である。

## (2) 研究の課題

今後、読書記録を活用した読書指導の実践を行いながら、教育課程の中で効果的に機能する読書指導の在り方について考えていきたい。

子供にとって心の記録である読書記録は、教師にとっては子供の実態を把握し、よりよい読書指導を展開するための指針である。よい指導ができてこそ読書記録の価値が高まる。入学時から卒業まで継続した活用指導を行うことが大事である。

また、読書指導は、全ての教師が、学校教育の全ての活動の中で展開する指導である。学校図書館の学習・情報センターとしての機能を利活用し、目的に応じた図書を活用できる力を付けることが読書の幅の拡充、読書の習慣化につながる。図書資料を活用した学習を行うことは読書力の向上に大きな意味を持つ。

そして、子供に本の楽しさを実感させるには、教師が子供の本をよく知り、本と子供との出会いを工夫して行う必要がある。日々発達し続ける子供に教師が手渡す1冊の本は、子供の成長に大きくかかわる。教師は、深い子供理解の上で子供に応じた本を手渡すことができる選書基準を持ち、「子供と本との橋渡しをする役割」(注6)を果たしていかなければならないと考える。

このように読書指導は、学年や教科の枠を超え、学校の全職員で全活動において取り組むことが大切だと考える。全校体制で読書活動の推進を行うことのできるシステムの構築について考え、実践を進めていくことが、私の今後の課題である。

---

## 注

- 1) 『『読書力』とは、単に書物を自分の力で読みとる能力を指すのではない。読書に対して興味・関心を持ち、自ら進んで読書しようとする意欲や、多種多様な書物から自分にとって必要なものを選ぶ力、さらには、書物から知識や情報を収集し活用する力をも指す。』  
文部科学省『高等学校学習指導要領解説 国語編』，東洋館出版社，1999年，70ページ。
- 2) 井上一郎編著『読書力をつける 上巻 - 読書活動のアイデアと実践例16 - 』，明治図書，2002年，25 - 26ページ。
- 3) 『子どもの読書活動の推進に関する法律』，2001年，法律第154号。  
『子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画』，2002年，閣議決定。  
文化審議会答申『これからの時代に求められる国語力について』，2004年。  
静岡県教育委員会『静岡県子ども読書推進計画 - 「読書県しずおか」をめざして - 』，2004年。
- 4) 阪本一郎氏は読書能力の発達段階を5段階に区分した。  
1，読書入門期（5歳～小学校1年1学期） 2，初歩読書期（小学校1年2学期～3年末）  
3，多読期（小学校4年～中学1年末） 4，成熟読書期（中学校2年～）  
図書館教育研究会『読書指導通論』，学芸図書，1978年，61 - 63ページ。
- 5) 天道佐津子編著『学校図書館図解・演習シリーズ5 読書と豊かな人間性の育成』，青弓社，2005年，72 - 73ページ。
- 6) 文化審議会答申『これからの時代に求められる国語力について』，2004年，24ページ。

## 参考文献

- ・『子どもの読書活動の推進に関する法律』，2001年，法律第154号。
- ・『子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画』，2002年，閣議決定。
- ・『文字・活字文化振興法』，2005年，法律第91号。
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編』，東洋館出版，1999年。
- ・文部科学省『高等学校学習指導要領解説 国語編』，東洋館出版，1999年。
- ・文部科学省『小学校学習指導要領 平成15年12月一部改正』，国立印刷局，2004年。
- ・文化審議会答申『これからの時代に求められる国語力について』，2004年。
- ・静岡県教育委員会『静岡県子ども読書活動推進計画 - 「読書県しずおか」をめざして - 』，2004年。
- ・御前崎市『なぶら子ども読書活動 御前崎市子ども読書活動推進計画』，2006年。
- ・秋田喜代美著『読書の発達心理学 子どもの発達と読書環境』，国土社，1998年。
- ・広瀬恒子著『子どもの読書 いまこれから』，新日本出版社，1992年。
- ・井上一郎編著『読書力をつける 読書活動のアイデアと実践例16』 上巻・下巻，明治図書，2002年。
- ・井上一郎著『読む力の基礎・基本 - 17の視点による授業づくり - 』，明治図書，2003年。

- ・井上一郎著『「読解力」を伸ばす読書活動 - カリキュラム作りと授業作り - 』, 明治図書, 2005年 .
- ・亀村五郎著『読書指導』, 百合出版, 1975年 .
- ・北川達夫監修フィンランド・メソッド普及会編『フィンランド・メソッドで本が好きになる小学生100冊読書日記』, 経済界, 2006年 .
- ・L. Ron Hubbard 著, アブライド・スカラスティックス・インターナショナル編, トランスレーションズ・ユニット訳『学び方を学ぶ本』, ニュー・エラ・パブリケーションズ・ジャパン, Effevtive Education Publishing 共同出版, 2001年 .
- ・Mervi Ware, Markku Tollinen, Ritva Koskipaa, Uusi salainen kerho4, WSOY, 2005, 北川達夫 & フィンランド・メソッド普及会訳・編『フィンランド・メソッド5つの基本が学べる フィンランド国語教科書 小学4年生』, 経済界, 2005年 .
- ・水野寿美子著『調べ学習に役立つ図書館シリーズ 楽しい読書のための本』, ポプラ社, 1995年 .
- ・水野寿美子著『シリーズ・活動する学校図書館7 読書記録の指導 改訂版』, 全国学校図書館協議会, 1999年 .
- ・水野寿美子著『学ぶ力をそだてる 新 図書館シリーズ 読書を楽しもう』, ポプラ社, 2001年 .
- ・棕鳩十著『本を読まない子の読ませ方』, 明治図書, 1985年 .
- ・大村はま著『大村はま国語教室 第7巻 読書生活指導の実際(一)』, 筑摩書房, 1984年 .
- ・斉藤孝著『読書力』, 岩波書店, 2002年 .
- ・坂本一郎・滑川道夫・波多野完治・室伏武編『新読書指事典』, 第1法規, 1981年 .
- ・清水眞砂子著『かわさき市民アカデミー講座ブックレット No17 子供の本とは何か』, (財)川崎市生涯学習振興事業団かわさき市民アカデミー出版, 2004年 .
- ・Stephen D. Krashen, THE POWER OF READING Insights from the Research, Libraries Unlimited, 1993, 長倉美恵子・黒澤浩・塚原博共訳『読書はパワー』, 金の星社, 1996年 .
- ・天道佐津子編著『学校図書館図解・演習シリーズ5 読書と豊かな人間性の育成』, 青弓社 2005年 .
- ・図書館教育研究会著『読書指導通論』, 学芸図書, 1978年 .
- ・内田伸子著, 『子供の発達と教育 ことばと学び 響きあい、通いあう中で』, 金子書房, 1996年 .
- ・脇明子著『読む力は生きる力』, 岩波書店, 2005年 .
- ・安居總子・東京都中学校青年国語研究会編著『中学校の読書指導 読書生活者を育てる』, 東洋館出版社, 2005年 .
- ・視察研修資料 多摩市立多摩中学校(2006年), さいたま市立浦和別所小学校(2006年), 川崎市立霞ヶ関北小学校(2006年), 静岡市立森下小学校(2006年) .